国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

208
12
694

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

花廼志満台初編巻之中

江戸　松亭金水編次

第三回　寡の姦計

ちつかまつる武家の囲ふる豊後邑境町へも程遠うつ老。さて〻拙者よりあつ私ども。彩氏あつくへしその中より。那席料理の廓もあり。彩し物さの似浮世料理の。茶屋も

ありて。往来絶えず。途絶ねば代の志づけさホ。琴三味線の秘ゑの所も。あまたあり。その中より。和之一とりの貢法師。

今流行の山田が流まで。琴の指南と表れかけ。婦のお
若い寡まるく。その活業はお髪結。ひとつ婦身ふくりの
くらしよ。その月代遣るものありけり。或日の夕べ迄和之介
稼ぎよ出くいまざかくらぢ。お若いは丹の例よ出かり。
ひとり孤独よさしむひ。ねりとびしげる面持ふく。対
居る面へ程にの。障子を記れ入来る。彼をとこれ
天岡町よ。その名はたろき紙屋の手代小六を業
小イ

小イ

お若いさん宅まで。チト お移げへが ふく来よ

お若いは おめづらしい小六さん何とおりつく おもる
まつさん 小イ 何ざ 来まれ ねへが チト 面目 移くりとけさ
ア ちぢく おあんなさいナ。何ざお連でもあるのく
小イ
ア
ちと一人つまざあり申した
りくどちくり 待うとあつ来るのつる。どうぞ私も お彼
いつて 来が。女い郎くお和子に あるざらう
そうい人 程度ドヤア 移へヨ。お若さんちよりと耳成かト
てくんるト さそけばおちい
うるづんく
よよぢさいます。ちやうど

今家にゐるも穢多なよ出て居ませんうち。二階へよりく
ぢ下づいてかまはすヨ。楽よおれがんるさい。モシおうゝゆゑ
ぶれでございますねト　小へどうぞアア塔婆
しくおくまを。路でゐんぞ奏ゐるやせうトいひて表へ
つまごちー。お墓をまゐきて多紙をりて。拭をいそぎ二
階へあがる。路よりお去へぶらちやうちんをつけ。花手水を
たこ多紙さげ　そくこゆるりと御影しるさい。ヤおまへ
さんよくト　お墓よあいなるまれば　モウでめんあさいますトいひて

まゝ小貝をむける。お去へさまがそまちやるまえ。拝を
ふーく下へおり。拝よりけーこ味線紙。ろくくひれ出んあ
でうー。古あ去くも二上り湖来。二階の二人が勝紙。ぢう
ぬくだかうの仇文句。小でゐでそれと仇弾の。その者ど
めさへゆうーけを。二階の二人を今さゝあ。手めちぶさた
ようさーおろひ。ちぐー紙も あくぶりーが。小六をお墓が例へ
ちうよう小へさくあめくへ笑べきくゐど表をみ刃のうへ
おくよ新参行のこゝろざー。今ど元の娘小どもまへめど

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

らしい心いき。そのころごろの程度きりくへ。ぞうろうろ
ろく
郷よ。あるあるゆもしてゆるもそ人が。何をいふもおれも
とうど天満宮時天満所の紙屋人をこの身分。ろく浜山のるへ
みつぎ貢もるのうわく。ちうしおめくう方親子二人で。ぞうろ形々
くうしくいく位のこそ。ゆもを形てるゆう。その宅の
おきさんといめ。女の繁盛さんで。ちびく来くも来る
うう。心ゆもくそまで。まきろ途中でそうも繁ねく
うう。ちうくつまて来このぞう。見うう用ゆあうるうちく

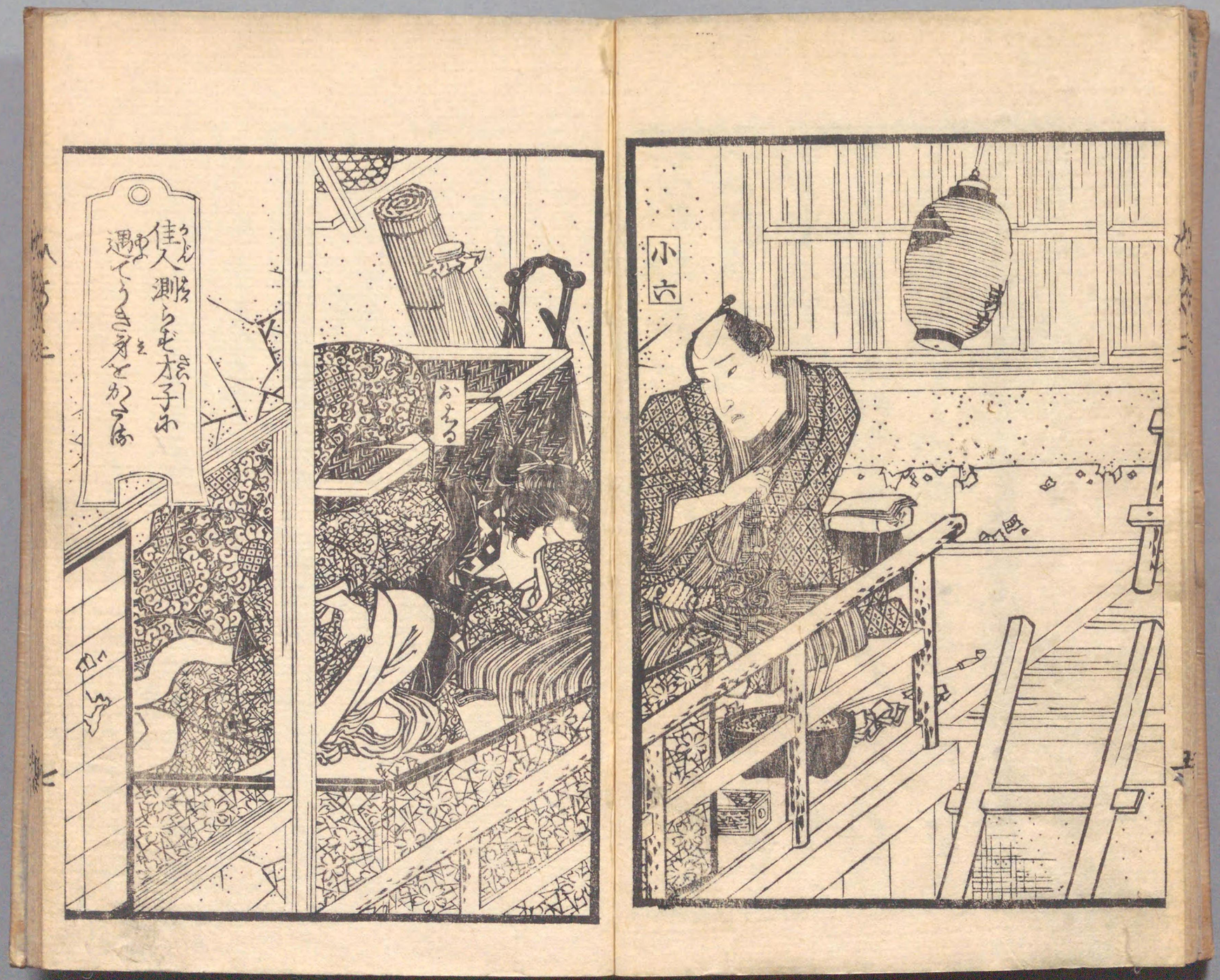
おきさんをたのこるせく。ちてよおれがゆうく屋くうう
ありがとう。もとこうしと郷ゆ時をじめてお見ようかを
親ちんすとくもるい。ゆちんせるるお河ゆまちとよ踊ふ
ごでいまを。先刻もおそるしゃうあり。後をぞくるい
親るゆが分のうく。ちうくとりよおくすてるく。おめとうけて
ちさいキートこのむ利も必やさた。でたづうしさぶさを
こち。何でおりゆ半ちゆも。ゆでいそまねおがとゑの。鳥る
思そゆ為のこぢ。意の和ちけも仏として。よりや世の中

あるくよ。御書くへさるなかりるり。小六さるこの形を仮
つけくおまそよりかへ独をりあふも縁とゆらぐ。ぬくく初
してさーむろひ。吉角のさるこをそくといめい。ようやど海い
縁ごらうく。かめくの方せく変くれくけるやう。こうちで
こんすそる気づひるるぶ。何様ちも私が角ちをこ人
といふのごろく。ア 残念も自由るやうるぶ。これが角で
一ちまるのサ。さ〳〵お茶さんが性さんるまび。どうく初れ
まんく。そまこいよいがるべト いひうけ 口濁る様。小六さ初も

まり書くかへ〳〵ぶ。イエ 十二かへ〳〵十二ぶやうくく初
ぶどうーョ ナアニかへ〳〵とまさぶどうさとりよの
ゆサかへ〳〵ぶおまくさんい男が好く。外ゆも偽人がうんと
ありませうく。気がのめまたとりゆるさト 小六初も
いかげんよさるョ。うんが二義でもそんあよゆやらん
ゆのどやア形くぶんのおまぶやうる者よ偽る奴がまるめう
上おさるさん。ゆまりが行ぶとあくぶよト 故意と小六も
臭をゆけ。勃然とるする風俗よ。ゆまいハット 臭敵

らめ　「ヲヤ小さんかの御人。私ゞ十二おまへさんを。るぶ
つまんのうち。そなたごもひろうとおもふ乳小さいなつて。ぞうぞ
ゑんぐわ悪しておくんるさいヨトのひとゞも小さい接拶せず。まぶ新
よちろく相手くるもらせ居るめへ。おまちの乳の毒そうま
奥さーのぞけば相手盗をヨ兄人が乗り身をそむける
おまちはまこもつけまつり。ヨまびまこりや身をそむける。
ゆ手前とまこゝぬ娘のところ。いらゞ乳とのこかすく
て。云解んとおもへども。まゞ別深ゆき男の心汲うく

わつと泣。やこうめーが思ふ。ちぶん深の一ちづふ
小さいフツと吹出しく　「コレサく串戯ざるゆ。十二ちをを
ちのうトいまてく安堵ー完ホーく　「拾ハそうと
思ひさけまど。何時までもちうとい奥ーく。私ハ十三まで実
ま乳ま。さうとひさうと。こま出発みさい。胸ゞ情ゝ考ん
ハトまどめくおちつき小さゞ成ちそへく。婚屋へまそ
ゞべ。小さいまを抑てゆり　「アヽヽ乳の毒ざけのう
そまどゞる　おめへ考実よ。おまを何て居るの



国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

ゑ〻「さ」ゆうぜいのひまんのうま　ゆ　だまりとこさときやア
きう移へぜ　「ア」そうあつてあまんさえの夜分よるさいは
ゆ〻おりまんそんるべ。五よかゝゝね　物ぜ式。エ伯ぐう
いろく　まえ穿て居るのう　「アレサキア」あそちろるさいヨー
こまてうり二階のたゝみもたえく。下よおきがこ味線の
音のこかとりよ笑えてり。おろゝ憂く頼子ゆへ。む〻家組
うえ二更のあゝせよ。小古お茶いそまくよ。いとあ色ゝく
五ぜ知て。名殘もちの相撲よ。つびたるきく別れゆ〻

かことをまてうり　おゝ式こんそ。そのの二階よあのび様の。五
よふえ紅ゆの伝ぜ。おゝ〻むひて移ゝひく。おゝ時月七緒る
おどよ。小古ハ内外よころ式つけく。寄るえびどふおる
ゆも。武ハ一朱あるひハ二朱。院代ゆゝ口ふさえよ。歩まべ
おちちハ行らぜる。濱ゆくりのゝうまとつえ。鈴ゆ濱ゆ去られば。
あゝ　鈴ゆゝ。おのひて。ちの毒よ毒で耳式そ移ゝく。
今ゝ張けのむんやと。ゆのうちよさぐゝと。巧むおゝゝ往
どち式どゝとあけて「おちさん内よ　おそ　トのひて」たゝる

をふり向く「ヨヤ お孝さん久しぶりでお知でご。此頃はぶらぶらしるさろう久しぶりでお知でおいる「アヽ お孝さんがチット悪い茶でご「そうゝ風ろうこのめざいウ。けのいいゝ「アヽ今月は大きいようございますヨ。そこで仏様より少しの法をしよう。小さえもらみまるまろうとろいく。ちょうと寄りましょう。アヽとまいる。おいるはめざ些だろう「ヨヤ 是はありがとう」おいるさとがいふ。キアヽい「振ぶる。ほてやア振はたより ものゝ苦労のあるが好ごヨ。縁よおいしそうゴザイ」「ヨヤ いゝで

久「小さえれ参んるさるるみもございません」「イヽエ仏様支サ。何ごろものごろいえ世ぶいそぶ有いそうで。アノ方も久しくお知でおいヨ。そまいそうとおまちえ。笑びおまへもお孝さんが久しい病気で風んるさるといろる。勿論小さえもちゆとがい貢でおげるさるざらうが。そう云ちやア可哀けそどおまへの様致で。今おりて向で具形をさろてごらん月小一あ二歩ハ。ウス出せとこそる出ます。そうへで居りのや常でも様まへくのらっろう。ゝゝ満よろるこちやア様へ。アノ

小ちさんも流切で。だいぶんい人ざけまでも。仏をいろふも
者ども五人のちで。〇亭が者ろうにるるくれんぞうのけ拵く。お
めく事小ちさんをよして。外よいく具相をおのち。ちてーが世
紙をてあげやう。ハイおぶしめーいみぐうございまんが
どうも具相るごとかたち。ちりあくいとちるさるのっぱく
ア年がいろ拵くといろく。つる麻律式ること成おちぐれく
小ちさんの世話よあるも。外の具相をとるも。おこるーまと
ぢちあいろくおちて笠もおぢえがあらが。拵あその人ぢく

も仏やかやがよくって。外よ形とおりのこれい出るいゆうみのぐが
五人と今の世の中ハ。みをる全づくこ方ね。かまくるハるへ者拵
拵ヨ一そそでも一そんるこ方外よ具相をちること止くサ
小ちさんよそうこそく。些為よるるわど全成りこひるさるがいく
おまくこちふくこれこてがそうこちてあげやう。二朱や二朱のたー
と金成わくのーつこ拵ぐ。ちノつる麻く者ハれ「ぢうーて私の
やうるるおのの。小ちさんるれぐこそ。形ーて具成りみくひとこい
まんのの成。おこちらーくそんるいぐやさまこ拵せう。とんぢ手拵

みるのハおつまあるこゝをゆゝさいます。ひとりと先来紙つゝさまを
ゝ。私い者でゝございまもゝ。「アヒサ」この子ハ。まゝ三ぱいまるゝのゝ
先来紙つゝさまゝゝ。ちやうど僥倖ゝゝらゝゝゝゝゝ「
イヨくそまでも。それでハ義理が来ゑせんゝ「るんの義理
の情のといのるハ今ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。そんな野暮ゝゝゝ
屋ゝより。袴元へ行くが今のゝ紙世ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

引ちぐ〳〵ゝ身の和之一へ婦さん今かゝりまゝと〳〵早かゝと
のりお俊の〳〵ハイ〳〵きを給まゝと〳〵そけのらをうけと
ちう〳〵ゝこのゝのでゝう。目も鼻もあるまゝません〳〵張サどう
で目いあるまゝるいなぐゝ。そんなもうおべかまゝしい書の
あの目。こいつのゝのくお師匠さんのあるげで今ハぎうう彩う
と琴の師匠を通ちくゆく。ゝ後よおりひるさんる。ぐとの
うへぎうゝ〳〵。たゝく世話さをしるの〳〵それいまゝも
とうがけて。いうくゝとるけまど。まぐ時帯ぐ来ねとうへまん

そゝへそうと婦さん。今ハうぐでゝまゝ。おまへハ
国ひのく世話でもあるさるゆうまゝ。もうもんるるハ変して
おうるせん。急く紙こを通ちぐへの出来さげるの。その
さるるゆう。ゝ〳〵かゝとゝやハ出とり目ぐ不良ぐ
どうも仕ゝへるまゝせん〳〵十ゝく分もゝへるさえるョ。みるる
ゝてぐ明るゆうる。今まで〳〵ゝ来く居さのハ。金沢ねと
ゆゝのハ浜へのゝ女児。ア紙屋の小宮さんと聞して。変く
三階の貸ゝ。世話をしてゆる男ぐ。いれを旦那とれが

いと動めるゆ。アノ児の身ごあ一ツハ此方の猪子ゆもある
提灯がわるゝヨ　「乳づくひのあい娘」ちゃう。そりやア
陸ろいけまど　「業ごるさんなヨ。ヨコテーづくまやさる
ゆハ考ふいヨる。夫ゆ注ひくそ和んゆ。とりやアヨコテーづいく
りやア。蔓人のほうゝいハ方がいゝと人。和くちゝと耳を
かゝるト　「ゆハ」がみゆ　「堅紙屋のヨ」ん　「往て。小山さんとゆ」
ゝく。ゆくゝ　「て強ごてヨる。アノ人も自ゆがた筆。十あや
そとゝハ大丈夫ごゆ。そゝくゝとるゝゆ人ハ見ゆ。こあもゆづけて

ゆけく路ハ此方がせーめくゆゝるゝゆ。ゆゝとぞうゞ春ゆゞえ
「ゆハいちく春色まゝゝゞ。ゆゞこりやア和ゆゞる和やア
そんるゆハ出茶くゝ　「そこの児ハるゞ出茶ゆくゝる娘
うゝとゝるゝ何でもしゆ。ゆゝく蔓人も左右ゝ勾蔓ゆでも
あゝゞいゝサ。ハ注ゞいけまゞゞゝくゝと。配蔓ゆ支分もちゞゞゆ。
手竟おめ人の身のゝゆ紙。おりゝゞゆゞゝゆ。
ゆゝくゝるゝのゆ。そゝとゝも春ゝるゝゝゝゝ蔓人。その蔓りゝゆやアゝ
ゝゝ　「ゆ濃。どんるゝゆゞゆゝらゝとゆ。ゆゝかゝゆゝゆゝゝ

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

ゴテ〳〵の笠〳〵。お仏の賛〳〵。人形〳〵。ト
ケ〳〵ヨウ。南の方。帰ぶ〳〵。かの。和尚〳〵。おまぶ神を。ケ〳〵と
おさん。ヨの〳〵モ。帰さん。あやまり。ま〳〵。ありやヨウが。ア〳〵
おまへ〳〵。わ角ヨウが。ア〳〵。ものく。ヨウや。ア〳〵。ものの。ケ〳〵。それを
ヨウが。ア〳〵。ものく。ア〳〵。ア〳〵。コレ。ものの。ア〳〵。ア〳〵。ア〳〵

ちゝ小六を打ちびなを結びーとりつゝれうゆ
る情の色おもをそえ遊をうゝびてゐ。おきちが二階座中高とた
のゝ小かけてあるもの。そのおつゝ云の洗ありてゐ山と白あるん
りの品ひ。のちや年寿も今年が限り。まゝ年わけ世事
のもち。おまつ式ちゝく呼おつく。報るおきゝ小例よ屋で。くゝさび
さそな燒ーゝとぴゝよも意のくせるよ。たのむ月日のもゝ三
て。今ハ陣屋の初めつゝこ。此わどゝ云せのいそぐ知よ。ゝーく
あゝぬあゝーさ。今夏ハゝ式切ねけゝ。おゝく鄭ーをせん

のとたのおも意ゝーおも。意といゝ字よ牙を甘めて。お
りひもいとぐゆゝるき。おゝゝわく拔寝ゝく。廊の此
ゝ方よ復む盲人。そまとゝんるゝり小六ゝギゝ。おゝが矛の
和ゝく一場を。ゝまゝくゝよ。おまめよ。なのまれて来ゝのゝ
あゝ。ハテゝ式きゝーく美まびよいゝと。腸よ痲の拘情く
和ゝく一いゝ式かゝ。「チト」お孫ゝひゝまん。ア小六ゝがお子
ゝ式ゝゝ。ちゝゝとおゝよかゝゝ。ゝトいゝ世も果ゝ小六ゝ
かけゝ「アリく」和ゝく一ゝんゝくゝ。ゝゝ出るゝゝよ逢ゝとゝ

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

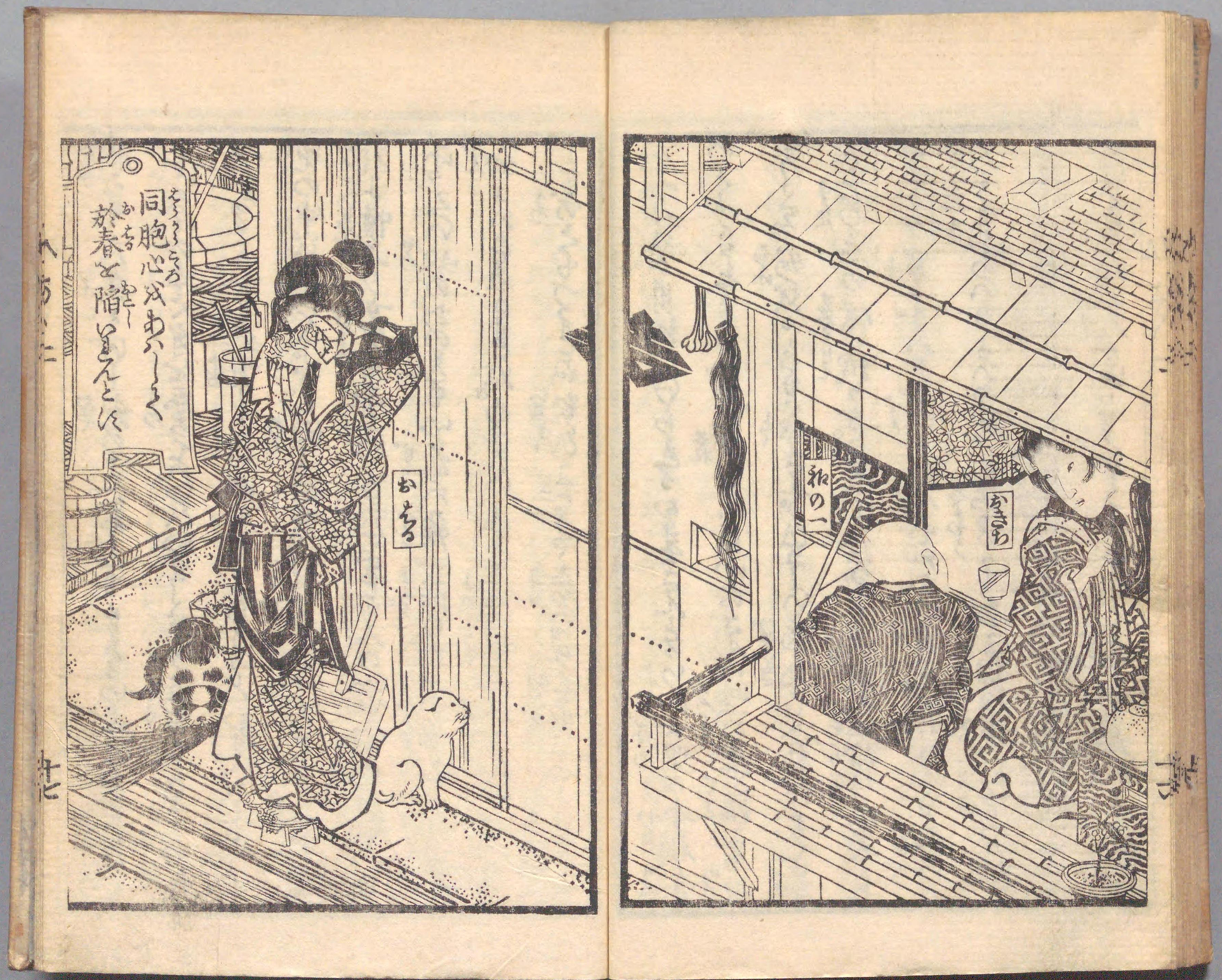
ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

の仕用ものやうなものをかぶるくらく用紙きて用もせずにるべえ
せんかく程にへちらつと思ひておんなるせんが〳〵ぐさまうるう
おうくへまつるくお影にせトいひて跡の方へゆく。小六を公遷
ちく。程ちう強出して。井戸のわきにく和さ一ちうせて〳〵サテ
ゆびね師さんうちの主倍うへトりあよ和さ一小前紙かさふけ
〳〵ぐさ人を居ませんうる。ちと門紙のあんるーぐるゆしても
うのごでいまんうトいうまて小六をわう紙ふまい〳〵すく
ぐさ居ハ去ません〳〵さて去やャスもおうるのものトやが。お

まんさんが見紙かけらまるおまさんとうの女児が。今朝糸
つくちらさるるあんさて見までの小古さんの些ハお世話ある紙
まーうぶ。ゆの紙ケースを爺さんが。ひさーの病気を入用ほうく。糸
屋新屋の信猪うう。見るーーーるーー底敷の換料。ゆのやら
かをうが当るまうく。おーの今でいかう分ぜ。爺さんも此ハ
大分うれあいのもよいのあるよ。法方うくのうの主倍信。逢方つ紙て
つうーが当て。廊へ泊く信今を。かづけやうとの相談よ。アイ
というそまとね二人が出。サテぞうーうとうく。考くうそも



国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

腐るや。大きうけー親のこと。やとまきこいえとはね義理合
そんきょうびとく身を養そこいひかりてこのが反古はるる。所経
かうるうくくこの。悪しくいのこうよりらうと。おまえさんとア
児の中式。彩くくどやと思ってこのが。親父どのが大きうこのその
外よ情ふり。女児も小くいがさんの男め。人の女児を猥褻おろく
ポッくの奴の。おのまもいの義の。絶一筋のぬーの果。こりやその
分ようこの去さまね。おれるいーのまこの先の先へ海をそかこと分る
と。おこもつまこの。考ひよこりやる。悪いのの考ひこと。後悔先

よ。こまの時分。そこいでア児がいろくこと。薄ようけいのく親愛
どの式。ちうく。こまりておいこまでど。どうで此まくでハ海ねようけ
おのるのが大きくこまこの。ようて小さくさんたがりでるく。おまえ方
見者のの。めいらくのもあるこの必要と。とうのく何もみこの今ばく
今十日ある。あるこるう。波風ろく。俄云まこ。ようても此身
を活いでまむ。何とおまえ小さくさんこの。ようく。彩くく金儲て
くどさんせねうとおまえ去さんが。たのこの小孫もぎろくりこ。ようく
それいどのたのも。ようこーが。彩くまこ。ようこ。仮初るぎ。十日

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694
ガラス使用

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

あぶ。附分ごうとのひ出来るべよいがと。婦母イヤハヤ安義ーく
子ゑ汗ゆぎまべあまさんがイヤ婦さんあまさん。あまさんが個も
とのあ紙どりはぐエとぐで死ねとるう。ほてがあんせ人種きて
小六さんよ出しませう。夫でも縛ぐりはうぶいきこそのうへ
父様さんのう筒もどざいませうと。あちつ死んらっさァ兎のは
後ハテサテ男つとるをどざりまん。和さんるあまよあかと合。るされと
おかりでおまんのどく。そまあへ婦もあぐりるぶきこ二ッるのあまさん
と。何ろおもくはくう。外の元のまくもりうう。見へこんい心も男同士

とるるのい大事わるまいうう。ゆうさあを紙あまさんよ。お性ー
ゆくは後投。きのくくまとと婦のひつけ。どぐく業まりくく
どざりまんとゆそ恒ま小六が性猫。お腹弱ぐ名まるー
和さく一い高智とひそあ「イヤモシ世の中のゆぐんるませんねく
さくいは家い谷泉高泉。ふ流る武士の流をでも。人寡ー
て坊ちゃーそ。わるこの男るが出るざるう。そをちありと
対とんざりのとあい兵ま出ませんイヤやぶうあ知ぶせんぢん
そんるう何とゆまぶせうるといそれて小六ま十方ホ人ま。まと

一ツあいをまちがひ発展。あるいはそうしてこれらのめるあいだに
あいてそのかげ人の知へ計らまでも。パチぐうあることとあいけ
ぬよ思案のあきこわる。和そ一へせんそてまく　ぐうぞ
ひあいさうと。もそあうるもちくひとうまし手間どうちふ
知そうとーそ。茶郎又うまくこの出あ人が。もちんせ人まるのもあい
そうーちくうんまべ和どもはんまがあ人さんへいやまるふとも
あきのどく。せぐうでどうまんとト小繋人織の繋つまー。ど
くよ和そく一者ゝそべ。今い鬼初の思案よあるどん。ふとりの

ゆめ大平の身のうへ。指のてきてくれ身の破滅とそくりの
うう弦人つまく。多亜のうち紙撥さぐり。たくうえ人ちきーふ
二分の。今紙ゆぐうそ弦ぜー。和そく一ぐ耳よに一ぐ紙いつ
ゆめ大者のうで。多えよさうどいありあうぐ。そさいとも
いうくわまど。者まこうんせくうりぜれて。余まうぐうとも
せねーけゆ紙。今ゆり今せのゆ五二分。ゆまくうりまーそゆう
ゆどうよ。まうくーと紙一日二日ぐうう伸ーくおそゆせ人。まうと
その門ゆい都合ーまくいうぐまと者ゆ門くゆ者さんとゆ。ゆーく

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

お後いつてまをす。サラく ひとんるこゝやうこ。ぶまを人方へも書ろうけ
ろう 都ろく此方がもろ乳のまゞご婦さんへも此と成。くるく特んでおまる
甘ゝトいもをゝ和之一結ろ元へ伊とゆもろ乳れまをせんが。ろく是
私ゞ。てうふゆ取りゆまをこ。此法をすゞへ歩行の。此海ゞとお
ゞ。ろまを。やりくまをくさんもゝんゞろゞ。ゞを四書ゞゞゞ
トいと及元さんそゝくよ。和之一ろかりゆく。ゆうん女てりく辻真つた
ゆまゞこ不ろんい情孫ゞも。偽ろまを世の中を。身に考ゞく
義の志満碁巻之二終

恨みけり

秘方

蘭方功能書

小半刺入
代百三十四銅

三月三

本家　江戸両國横山町三丁目　大坂屋半藏

京都賣弘所　堺筋東洞院東へ入　大和屋喜右衛門

大坂賣弘所　心齋橋筋博労町　河内屋重太郎

取

次

諸

国

浦

々

産

[illegible]

鮮毒養童丸　壹包代百銅

小兒たべぐすり通の妙藥　半包代五十銅

御藥調合承家　東府隱醫　岡田三折製

賣弘所　江戸両國橋山町二丁目　大坂屋半藏

取次　[illegible]

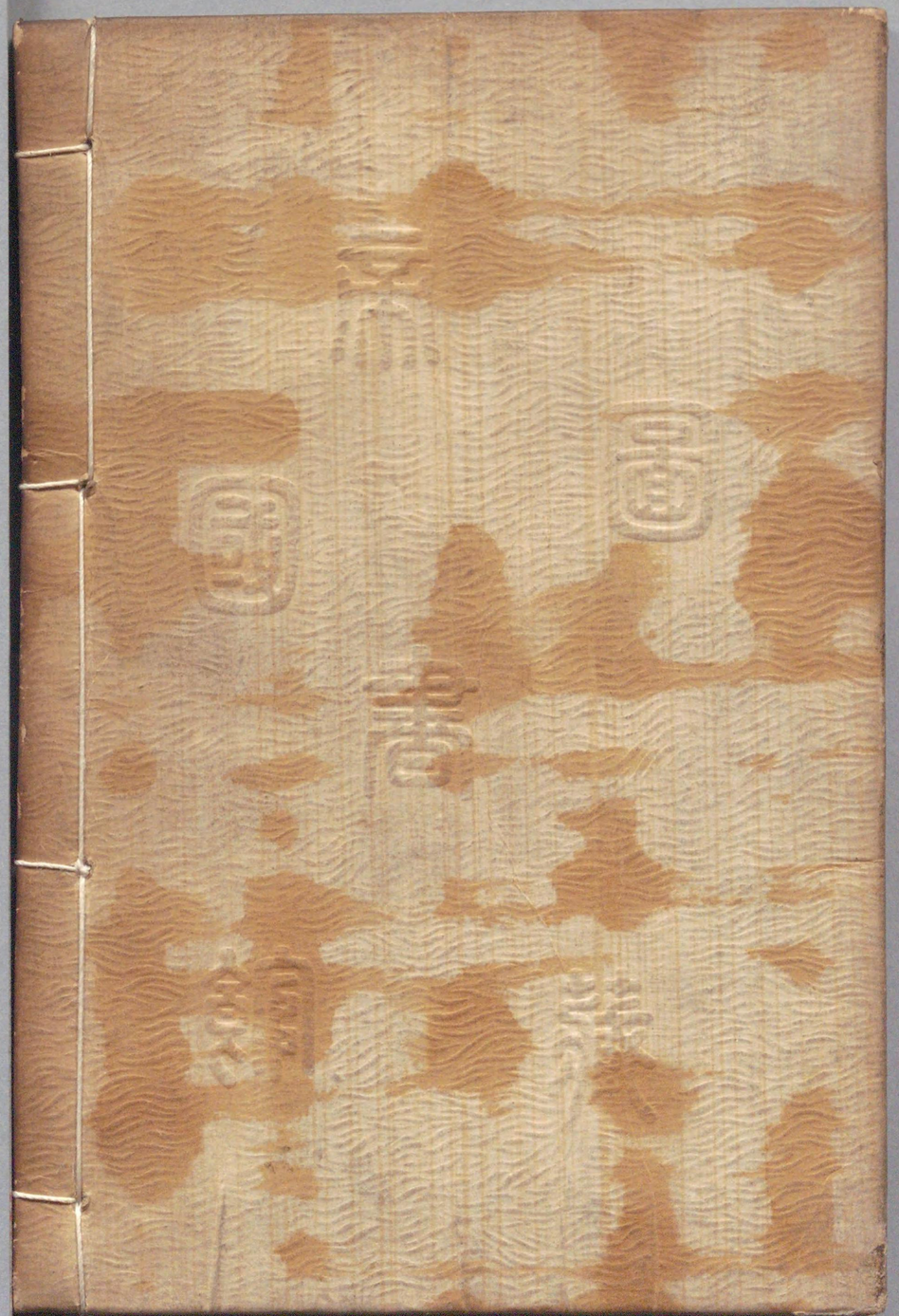
国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用

208
12
694

国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用



国立国会図書館　花廼志満台 4編 208-694

ガラス使用